

(論文)

ドイツ帝国における社会改革の進展と学術化

田 畑 洋 一

ドイツ帝国における社会改革の進展と学術化

田 畑 洋 一

和文抄録：どこの国にあっても、社会保障が対象とする貧困問題は社会によって引き起こされた社会問題である故、政治的に対処可能とみるべきである。ここに社会改革の必要性と可能性がある。ドイツでは、1860年代以降、社会改革にとって重要な学問分野としては、特に経済学と予防衛生学が注目されていた。この二つの学問分野から学術と社会改革の独特でアンビバレントな関係が明らかになる。当時の社会改革は、科学と組織に対して敵対的ではなく、社会系科学と社会改革の分かち難い結びつきがみられ、これが救貧制度の近代化をもたらした。

Key Words:労働問題、アンビヴァレンス、救貧制度、社会改革、学術化

はじめに

1871年の帝国樹立以降、ドイツは急速に進む工業化・都市化と80年代の労働者保険の制定により、労働問題が旧来の貧困問題とは異質なものとなるが、とくに大都市ではその窮状を改善するための社会改革運動が進展した。市民層は自らを自治の担い手と意識し、90年代の「新しい路線」の下で改革運動に取り組み、旧来の救貧扶助をも社会改革の対象とした。当時の社会改革は科学と組織に対して敵対的ではなく、社会系科学と社会改革が結びつき、このことが救貧制度の近代化を促した。そこで、本稿ではドイツ帝政時代における労働生活を概観し、社会改革の進展と学術化を考察する。

1. 産業社会の形成と労働者生活

帝国樹立以来みられた急速な産業化と都市化、すなわち、ドイツ産業社会の「形成」によって労働者階級の窮乏化の問題が社会問題の主要を構成することになるが¹、しかし、産業社会の中で労働問題として浮かび上がる社会問題は、工業化の時代の一産物であるとしても、それは「古い、工業化以前の貧困の最終的段階」に外ならない。19世紀の社会問題を世紀のかわり目の工業化ないし資本主義的経済構造から溢れ出たもの、あるいはそうしたものと捉えたとすれば、「それは的を射ていないと言えよう」(Fischer1982: 56)。

労働問題の解決を目的とするドイツ帝国の社会政策は、1880年代に「労働者保険」として制度化され、これにより「労働者」の問題は、旧来の「貧困者」問題とは区別されるようになった²。しかし、旧来の(市町村による)「救貧扶助」(Armenfürsorge)が労働者のための社会保障制度ができたからといって脆弱化することはなかった。なぜならば、初期の労働者保険は限られた人々を対象としていたため、救貧扶助制度の対象者と重なり合っている部分が多かったからである。しかし、労働者保険の構築・拡充と並行して、救貧扶助そのものが改革の対象となり、この改革

により救貧扶助はサービスを特徴とする市町村による扶助が主流となった。今日でもみられるドイツの福祉政策の特徴である二重構造は、この改革がもたらしたものである³。すなわち、物的保障(保険)と(市町村による)社会サービス(扶助)との二重構造がそうである。

ところで、ドイツは帝国樹立から数十年の間に産業化された社会へ急速に転換したことになるが、これが社会および文化に広範な影響を及ぼした。新しい産業中心地の誕生により、人々は東から西へ、地方から都市へと、これまでは考えられなかったような遠いところまで移動するようになった。人々は、何世代にもわたって住み慣れた土地を出て、危険がいっぱいの都会にやってくる。そして、あわただしく建てられた労働者あるいは貧困者用の宿に押し込まれる。1873年以降の「泡沫会社乱立時代」(Gründerkrach)においては、大量の失業者を産み出し、彼らは、定住することなく、生計をたてるための収入と職を求めて国中をさまよった。「故郷喪失」(Heimatlosigkeit)というのが、この時代のキーワードとなったのである(Sachße/Tennstedt1988:15)。懐かしい故郷は戻るにはほど遠く、都会の過密地帯は、貧困で悲惨な状態、その荒廃はひどく、故郷などと呼べるようなものではなかった。

産業と市場は調和と豊かさを全ての人々に及ぼすものではなく、社会に恐るべき亀裂をもたらすものであることが明らかとなった。そこに新たな下層階級が生まれ、混乱と混沌に対する市民の恐怖を掻きたてた。このように社会問題が生み出される原因は、人口爆発のみならず、地域における人口分布の変動、別の言い方をすれば、人口移動あるいは都市化であった(Lampert/Althammer2007:32)。そして貧困という現象そのものは、旧来の都市に定住する貧困に加え、徘徊する貧困層が増大した。

また、科学・技術・産業は、進歩と豊かさをもたらすだけではなく、社会の伝統的なつながりを破壊するもの、冷酷に孤独化を引き起こすものとしてとらえられた。新しい技術によって可能になったこと、すなわち、高速度な新交通手段と情報・メディアは、新たな地平を開くと同時に、個人にこれまでには無かったストレスをかけることになった。大都会に出現した消費を促すモノや散漫さは、これまでとは異なった刺激の氾濫、不均衡、過敏さを意味した。「近代的いらいら」(moderne Nervosität)というのが時代の病となった。

科学と技術の進歩、新しい芸術的表現形態、より深く踏み込んだ人間性および社会的状況の洞察、無意識の発見。これら全ては、新しいタイプの社会的自意識と同時に、新たな恐怖と不安をもたらした。そこに、社会主義者の労働運動が革命的で「無神の」スローガン掲げて加わったのである。労働運動は、伝統的社会構造の解消を政治的に利用し、国民の不安をさらにおおった。この不安感が、19世紀末の時代精神に、一風変わった、社会的・文化的「アンビヴァレンス」(Ambivalenz)を与えていた(Sachße/Tennstedt1988:16)。これに関し、マンは次のように述べている。

「我々は、時代精神の思想に対する信仰と、時代精神の不信心、すなわち、その憂鬱な相対論とのいずれをも軽蔑する。理性と進歩に対する彼らのリベラルな信奉は、我々にとっては一笑に付すべきようなものであり、世界を究明するという彼らの一元論的な自惚れは甚だ浅はか

である。そして、その学問的な高慢さは相殺され、ペシミズムによって凌駕される。また、音楽的な夜と死との連帯によって圧倒される。そして、これが他の何よりもはっきりとした特徴になるであろう。」(Mann1982 : 716)

進歩主義の信仰と並行して、次第に文明厭世論が台頭した。文明厭世論は、産業、技術、科学を、世俗化・客体化・脱精神化による文化的・社会的破壊力ととらえ、90年代以降、さまざまな社会改革運動において表明された「反文化」を産み出したのである。

2. 社会改革の取り組み

古典的・自由主義的な教義の崩壊—会社設立ブーム時代以降は、社会を目覚めさせる、社会改革の新しい考え方を生む隙を与えた。しかし、この社会改革は、概していえば、古い自由主義以前の因習と結びついていた。最も古い社会改革の考え方は、保守的でキリスト教社会的な精神に基づいていた。その考え方の起源は、ドイツでは社会の個別化、世俗化・脱信仰、脱階級制が初めてはっきりした三月革命以前の時代に遡る。もともと、社会の階級を再構成することと、神を認めなくなった下層階級の人々を「キリスト教徒への伝道」(Innere Mission)で再びキリスト教徒にするという考え方であったが、それが多様に修正された。社会的プロテスタンティズムは、統一的な中央機関が無いという教会の組織形態故に、また、さまざまな宗派間における見解の相違の結果、理論的に完結した社会改革のコンセプトを展開することができなかった。しかし、プロテスタントのプロイセン、すなわち、ドイツ帝国では社会的プロテスタンティズムは「国家に近い」存在として発展した。そこでは、市町村および国の社会政策が政治的に結びついており、また、その理論上の基盤は、それぞれ非常に異質な解釈をした「国家社会主義」(Staatssozialismus)であった。これに対して、社会的カトリック主義は、社会モデルであるが故にはるかに完結していた。連帯の精神に支えられた組織体の社会は生き生きとし、それが家族を基盤とした共生のための包括的な形態(市町村、教会管区)を構築する。社会的カトリック主義の唱える社会改革は、下層階級の人々をゲノッセンシャフトによって、社会に組み入れることであった。しかし、社会的カトリック主義は、その組織形態において、文化闘争以来、支配的な国家と妥協するという不安定な状況下で、「国家から離れた」、非常に結束の固い共同体となった。

「プロイセンのプロテスタンティズムとは異なり、カトリック主義は、上から、すなわち、国家機関を介して影響力を行使する状況にはなかった。カトリック主義は、その目的を達成するために、カトリック教徒の動員を必要とした。しかし、文化闘争においてカトリック主義を勝利に導いたことが、社会民主主義によって崩壊の危機に直面していた。カトリック主義は、これに対して、社会的テーマとの取り組みに至るまで全ての力を傾注した。」(Greschat1980 : 198)

帝国時代の社会改革の取り組みにおける新しい点は、市民の世俗的な改革の取り組みが隆盛を

極めたことであり、さまざまな種類のものであった。まず第1に挙げられるのが「生活改革運動」(Lebensreform-Bewegung)である。これには、全く異なった目的を掲げたさまざまな運動があるが、その共通の出発点は、文明厭世論的な大都市・科学・技術に対する批判、資本主義に対する批判、すなわち、作為的な社会に対する批判であった。生活改革が目指す共通の目的は、「自然な生活の仕方」(natürliche Lebensweise)への回帰であった。それは、科学的な啓蒙理性に自然の理性を対置するものであり、社会・文化・医療に関する全ての諸悪の根源が大都市の作為的な生活にあるとし、社会によって強要された農村離脱を自ら選んだ都会脱出と対置した。社会批判は、ここでは主に大都市に向けられており、産業資本主義が社会や文化にもたらした結果を否定していた。しかし、この社会批判が目指した改革は、個人個人の人生の改革でもあった。いうならば「社会問題を個人レベルに移行」させたのである⁴。

土地改革運動と田園都市運動は、市民社会改革という当時の改革運動で2番目に大きかったものである。市民社会改革の理論的基盤は、下層階級の人々を社会改革によって市民社会に融合し、それによって「国民全体」としてまとめる社会的責任を、中産階級の人々が受け入れるということであった。実際の取り組みは、帝国全土におよぶ多数の大規模な改革団体(社会政策団体、ドイツ公的医療制度協会、社会改革協会など)によって、医療扶助・青少年扶助・住宅扶助といった市町村による新たな扶助という形で行われた。究極的には、市民女性運動を挙げることができるが、この女性運動は産業資本主義的で即物的な、そして、特殊な父権制文化に対して、女性の理想を掲げ、社会改革を「女性の文化的使命」(weibliche Kulturaufgabe)ととらえた。女性運動は、中産階級による社会改革と密接に結びついていた(Sachße/Tennstedt 1988 : 17)。

このように、それぞれの改革の目的とやり方は多種多様であったものの、共通する2つの前提条件があった。すなわち、社会の欠陥が結集する場所である大都市への批判、そして共産主義でも資本主義でもない「第3の道」(dritten Weges)というイデオロギーである。社会は、革命によってではなく、社会改革によって変わるべきであって、この改革は社会の経済的・政治的基本構造に触れるものではなく、個人の生活の仕方や社会的責任を変え、社会援助を通して融合を図ることによって、社会を変えていこうとするものであった。

「それらは、弱者の解放ではなく、強者をほどよく抑制し、劣悪な貧困問題を軽減することを目指している。(中略)政治的情況を変えることは避けながら、つまり、政治的な力関係や所有関係に触れることなく、社会問題を解決しようとする改革である。」(Frecot/Geist/Kerbst 1972:18)

しかし、生活改革と社会改革の間には、主張する社会批判の出発点に決定的な違いがあることを見逃してはならない。生活改革は、反科学・反工業・反都市化を掲げ、徹底的に自然と調和した生活形態・生産形態を目指した。すなわち、当時のボヘミアンシーンならびに反自然破壊・反人間疎外運動の巡礼地であったモンテ・ヴェリータ菜食自然療法施設を、いわば治外法権の中心

地とした「反体制運動」(Aussteiger-Bewegung)である。これに対して、市民社会改革ははるかにプラグマティックであった。工業化と都市化が引き起こした社会問題を批判しながらも、都市から逃避するのではなく、逆に、都市部に暮らす下層階級の人々の生活条件をより人間的なものにすることを目指していた。すなわち、都市部の貧困層を市町村による扶助制度や医療制度を通して融和統合することである。これらの扶助制度と医療制度は、都市部の貧困問題の悪化を防ぎ、有産階級と知識階級の人々は、これらの制度の中で社会全体に対する自らの責任を全うすべきものとされた。換言すれば、市民社会改革が目指したものは、キリスト信仰に基づく責任の意識から社会的な取り組みに至ったプロテスタントやカトリック教徒と同じであった。

市民社会改革の社会的な担い手は、主として自由主義を唱える都市部の教養ある中流階級であった。ドイツの自由主義は、帝国レベルでの影響力が減じるにつれて、80年代以降、大都市の政治および行政により大きな関心を寄せるようになっていた。その結果、ドイツの大都市では、地方自治による社会改革が進展し、90年代初めの「新しい路線」(Neuen Kurses)の気風の下で、その効果は広範囲に波及し、教育を受けた市民階級が協力しあって均質な改革運動に取り組んだのである(Bruch1985:112ff)。

工業化と都市化がもたらした社会状況を完全に批判しながらも、市民の社会改革は科学や組織に対しては敵対的ではなかった。市民社会改革にとって、科学性と計画的な組織化は、「社会的損害」を無くすとはいわないまでも、軽減するものであった。医学と社会系諸科学の進歩があってこそ、社会の貧困問題に対して計画的に対処できるようになる、自分達の考える社会状況が作り出せる、と考えていた。したがって、科学と合理的な組織は、市民社会改革が市町村による社会事業に取り組む上で基本となる要素であった(Sachße/Tennstedt1988:18)。

3. 「社会改革の学術化」とその組織

ドイツ帝国時代における社会系科学と社会改革の分かれ難い結びつきは、社会、実生活、そして人々の気分を世俗化するプロセスの一部と理解する必要がある。そのプロセスの中で、旧来のキリスト教的な理解が世俗的な思想の前に影を潜め、キリスト信仰に基づいていた扶助と慈善活動は、法律によって正当性を与えられるようになっていった(Nipperdey1983)。社会改革が科学と結びつくことによって、扶助は新たな根拠を得ることになり、それは自然発生的で慈善的援助活動の動機や伝統的な警察による抑圧型扶助の考え方とも一線を画していた。「下層階級の国民」(unteren Volksschichten)の貧困問題は、もはや神の御心にかなった自然な状態ではなく、社会によって引き起こされた社会問題であり、だからこそ、政治的に対処可能で、排除可能なものなのであった。だからこそ、学問は社会改革の可能性と必要性をはっきりと示すべきものである⁵。

社会改革にとって重要な学問分野としては、1860年代以降、特に経済学と予防衛生学が注目されていた。社会改革を社会系科学として構想するという経済学の取り組みは、「講壇社会主義」(Kathedersozialismus)という概念で有名になったが、帝国樹立の頃に新たに成立した経済学は、世紀末に至るまで、主にグスタフ・シュモラーの歴史学派が唱えていた。シュモラーは、経済学

とは「道義的・政治的な学問」(moralisch-politische Wissenschaft)であるべきで、学術的洞察によって、社会的関係を政治的な形に作り上げるための拘束力ある規範をも作り出すべきである、と唱えた(Schmoller1911:492)。これは、-マックス・ウェーバーが批判したように一経済学を倫理学のレベルまで引き上げようとする試みでもあった(Sachße/Tennstedt1988:19)。

こうして社会改革は社会系科学と分かち難く結びつくこととなった。この学術的概念は、社会的共同生活の規範に拘束力をもたせることを求めたが、これは公共の福祉という概念に沿ったものであった。公共の福祉とは、風紀および正義という規範を指向し、共通の文化・歴史・言語をもつ民族集団という概念に基づいていた。そのため、社会系科学は、共通の文化・歴史・言語をもつ民族集団の団結を強く目指す社会学とする必要があった。共通の文化・歴史・言語をもつ民族集団の団結は、産業の発展とそれが社会に引き起こした事態、すなわち、階級への分裂と階級闘争によって脅かされたため、労働者階級の中産階級への融和統合を可能にする社会改革的な施策で保護もしくは取り戻す必要があった。このように、経済学者達の唱えた公共の福祉の概念は、自由主義的経済学説とも、革命的社会主義とも一線を画していた。

しかし、学問とは、社会改革の必要性を学術的権威で唱えるだけではなく、解決すべき問題や必要とされる施策の種類に関する詳細な情報を提供し、それにより、改革の基盤を確立すべきものでもある。経済学においては、融和をもたらす社会改革の規範を作るためには、社会問題、社会状況、生活状況に関する詳細な情報を得る必要がある。これら詳細な情報は、主に社会政策学会の枠組の中で多大な労力をかけて実施したアンケート調査によって得ていた⁶。アンケート調査の場合は、統計と異なり、単に数量的なデータだけではなく、問題の主観的で「道義的側面」(moralische Seite)や質的な面も考慮された。社会政策学会のアンケート調査は、ドイツにおける経験的社会研究の起源のひとつといえるが、社会改革の基盤を学術的に裏打ちされた確かなものにしようとするこのような取り組みから、客体化、イデオロギーからの解放を目指していたことがはっきりとわかる。社会改革を右寄り左寄りと政治的に取り扱うことから一線を画したのであり、そこに経済学者達の学術的かつ政治的なコンセプトが反映されている。すなわち、中間派による社会改革であり、政治的・経済的な利害闘争を超越した大学教育を受けた人々による社会改革なのである(Sachße/Tennstedt1988:19-20)。

19世紀に保健衛生というと、予防衛生のことを指していた。ここでも、経済学の場合と同じように、分析的・経験的な要素と規範的要素が密接に結びついていたが、より直接的な関連性をもっていた。自然科学上の正確な測定データは、そのまま、寸法・種類・重量に応じて正確にまとめた医療に関する要請事項として実行された(Göckenjan1985:119ff)。既に1869年に、ライプチヒ大学の解剖学教授であり警察医であったレクラムが、予防衛生に関する綱領をまとめていた。

「公衆予防衛生は、立法機関に対して、彼らに欠落している自然の必要条件に関する知識を与えるものである。国民のはたらきによって国家の繁栄が維持され保障されるべきであるとするならば、国民のために、自然の必要条件を守り、保障しなければならない。しかし、自然の

必要条件を、立法機関の規準として作成するためには、その寸法、数量、重量を正確につきとめることが必要である。(中略)病人、生徒、囚人が必要とする新鮮な空気の容量―墓地に必要な面積と土壌の負荷に応じた埋葬サイクル。(中略)十分な明るさに必要な窓ガラスの面積やある温度で十分に暖房するために必要な暖房面積―住宅の高さと道路の幅の適切な比率、人口、建築面積、植栽の適切な割合、等である。(中略)これらの要請事項は、医師しか主張することができない。というのは生理学を学んだ医師しか、自然の必要条件の規模と重大さを測ることができないからである。どのようなケースにおいても、医師だけが問題提起することができたが、その解決法については、同胞の助けを必要とすることが多かった。(中略) (Reclam1869:2ff)

自然科学上の要求であることと、予防衛生に目的を絞っていることにより、予防衛生と、そこから導かれた市町村による社会改革は、経済学が改革に求めたことに比べて、政治色が少ないことが多く、そのため議論の余地が少ないようであった。しかし、予防衛生を通じた社会改革が非政治的であるケースは限定されていた。というのは、ひとたび、病気や死亡時の社会的条件がどうであったか、あるいはどう予防するかについての問題が浮上すると、その後、介入の優先順位、および、それによって影響を受ける社会的利害関係に関する問題が出てきたからである。予防衛生がこのように政治的要素を内包していることは、一見したところ、「倫理的」な経済学の場合ほどには明白ではない。なぜなら、予防衛生では、政治的要素の取り扱い方が、専門分野ごとに異なっていたからである。なかでも細菌学と公衆衛生学では、政治的要素の取り扱い方が随分違っていた (Sachße/Tennstedt1988 : 20)。

19世紀の予防衛生は、化学、物理学、生理学を基礎に環境的予防衛生として始まった。予防衛生ということで、これらを担うのは、医師、行政官、建築家、技術者になっていった。彼らは、寸法・数量・重量に基づき、食事、衣料、住宅、住宅建築、都市計画に介入した。

しかし、慢性疾患に関しては、まもなく限界にぶつかった。プロレタリアートの間で最も多い病気である結核について大規模な調査を行った結果、事実上全ての人々が感染していることがわかったのである。しかし、その中で発症する人はわずかであった。そして、このわずかな人達は、特異で劣悪な生活条件を特徴としていた。個々人に免疫を与えたり、結核の治療を行ったりしたが、20世紀に入るまで、どの試みも成果をみることはなかった (Naunyn1900)。

そこで、公衆衛生学は、発症したグループ固有の、あるいは階級固有の要因に関わろうとした。しかし、公衆衛生学によって科学的に引き出した(社会的)要請を承諾させることは、一環境的予防衛生や細菌学的予防衛生の場合より一難しかった。というのは、公衆衛生学から生じる介入要請が、細菌学から生じるものより政治的であったからだ。公衆衛生学は、社会の発展過程の中にある特殊な要因によって、全体の「正常範囲」(Normalitätsspanne)から逸脱してしまった人々のグループに注目したのである。公衆衛生学では、病気にかかる危険性、発症、病状の経過およびその結末は、各グループによって異なり、そのために、予防と撲滅のための施策もグループ毎に違ったものが必要である、と考えた。要するに学術的規範としての公衆衛生学は、「地域的、時

間的、社会的にひとつのグループに属する個人およびその子孫全員に対して、普遍的な予防衛生的環境を与えることを目指す学問」であった(Grotjahn1912:13)。

このように、公衆衛生学が求める改革は、下層階級の人々に物理的に必然的なものを与えない既存の社会状況を批判するものであると同時に、学術的に裏付けられた規範に従わない下層階級の行動そのものに対する批判でもあった。そのため、学問は、当事者を「強制的に社会化すること」(Zwangssozialisation)、学術的に割り出した行動に強制的に慣らしていくための媒体としての性格を帯びるようになった。これは、同時に、当事者自身による問題処理メカニズムの破壊をも意味していた(Spree1981:156ff)。

二つの学問分野—経済学と予防衛生学—から、学術と社会改革の独特でアンビバレントな関係が明らかになる。学問は、改革を始めるための政治的な強圧手段であると同時に、目指す改革を客体化し、政治の影響を排除し、イデオロギーから解放すべきものでもあった。学問は、政治的な政党紛争や社会的利害関係を超越した、客観的で目的にかなった社会政策の基礎を築くべきものであった。このように、この改革は、表向きには利害関係とは無縁の、中立的な位置付けであったので、この改革の社会的担い手が誰なのかすぐにわかる。すなわち、大学教育を受けた人を含む市民中産階級であり、彼らは、右派からも左派からも同様に一線を画していた。学問は、市民中産階級の社会的規範を強化するための手段となり、この規範とは、激動する社会の中で、いわば信頼のおける安らぎの中心のような存在であった。世紀末にかけて構想された社会改革における学問の役割は、その社会的担い手と同じようにアンビヴァレンスであった。社会改革の規範は、確かに、学問によって作られ、したがって、行政が実施できるようになったわけで、それにより、社会改革の官僚化、職業化の基礎を築くに至った。しかし、学問は一時的に、教養ある市民中産階級が義務と感じていた。公共の福祉、すなわち、「国民全体」(Volksganze)に対する社会的責任のひとつの特殊な形態と結びついたのである(SachBe1986:95ff)。

実践的に改革を論じる学問、社会的責任を帯びた学問は、大学や研究機関以外でも実効性ある組織を強く求め、そのため、改革を目的とする複数の団体が設立された。そして、これらの団体は学術と社会政策を結びつけることを表明した。1860年代から世紀末にかけて、社会改革が学問の様相を呈したことは、このような動きに表れている。

組織の形態については、国家とは関係のない、民間の社会活動が行えるような、当時典型的であった市民団体の形が選ばれた。しかし、帝国全土に広がった新しい改革団体は、古典的な市民団体や従来の地域的な慈善協会とは明らかに異なっていた。毎年開催する会議を通して世間に働きかけ、活発な出版活動も展開した。利他主義と信仰に基づいた伝統的な動機は、職業政策的、一般政策的な動機へと変わっていった(SachBe/Tennstedt1988:22)。このようにして、民間による援護活動は、公的で政治的な次元をもつに至り、伝統的な民間慈善事業とは明らかに違うものとなった。

ドイツの団体のなかで、まず言及すべきは「社会政策協会」(Verein für Socialpolitik)である。これは、当時の「講壇社会主義」のさまざまな学派が集まってできた組織である。社会政策協会は、

1873年10月13日、アイゼナッハで正式に発足し、大学教授、行政の高官、企業家、自由業者らが会員であって、経済学者だけの団体ではなかった。しかし、経済学者達は、協会の事業に決定的な影響を及ぼし、「講壇社会主義者」の組織という性格を与えた。協会の目的は、社会を計画的に変革していくこと、意識的な社会改革を行い、それによって、労働者階級に対する極端な冷遇を阻止し、彼らを市民階級に統合することで、革命を回避しようとするものであった。目的は普遍的であったが、協会にはさまざまな政治的、学術的立場の人々が集まっていた。大きく二つの陣営、すなわち、保守主義者と自由主義者に分けることができる⁷。保守主義派が、父権的な国家を中心とする社会政策を支持し、社会の利害関係に国家権力を介入して統一を図ることを目指したのに対して、自由主義者達は、当事者が参画し自主的に組織化することを前提とした上で、公正な所得配分を求めた。さまざまな立場の人々が共通して拠り所としていたのは、経済学が社会問題の解決のための「倫理的な基礎」(ethische Fundierung)になる、ということであった。協会は1870年代、その活動の初期の段階において、学術的調査と情報によって、社会政策関連の法律に直接関与しようと試みた。その後、活動を進めるうちに、内部の見解の相違が生じたので学術的、啓蒙的な目的を第一義的に掲げる団体になっていった(Bruch1985)。

1873年に発足した「ドイツ公衆予防衛生協会」(Deutscher Verein für öffentliche Gesundheitspflege)が19世紀の予防衛生運動から生まれた。この協会は、既述のカール・レクラムの綱領を実践的な社会政策改革の中で実行しようとしていた。ドイツ公衆予防衛生協会のイニシアティブをとっていたのはプロの医師達であったが、同時に、オープンで政治的な構想を抱いていた。その前身であるニーダーライン公衆予防衛生協会と同様に、専門外の人々にも開放されており、医師や技術者と並んで、地方政治家が活動していた。彼らは、広範囲に及ぶ協会の活動の財政面、政治面を担当していた。公衆予防衛生は、当初から、国家の使命というよりは、自治行政の課題であるとされていた。公衆予防衛生綱領は、協会もしくはその会員達の粘り強く細かい調査作業や会議報告などでまとめられた。その結果、周期的に発症する急性の感染症(伝染病)に対して、協会の提案する内容は具体的になった。90年代以降、こうした協会のイニシアティブがあったからこそ、ドイツの大都市における社会行政は、主として予防衛生、とりわけ医療扶助から拡充されていったのである(Frevert1984:231ff)。

社会改革にとって重要な学問分野に厳格に当てはまるこれらの改革団体の他にも、多くの社会改革組織が結成された。一部は、限定的な目的をもったもの—ドイツ土地改革者連盟、ドイツ田園都市協会、ドイツ住宅改革協会、ドイツ国民衛生協会、ドイツ乳児保護協会など—であったが、普遍的な改革を目指すもの—社会改革協会、プロテスタント社会問題専門家会議、カトリック社会文化・援護事業(労働者福祉事業)協会など—もあった(Sachße/Tennstedt1988:22)。これらは全て、固有の「組織環境」を形成し、その中で、学問としてとらえられた社会改革の実行を試みたのであった。

注

- 1 足立正樹(1982)「古い社会問題と新しい社会問題」神戸大学『国民経済雑誌、146(4)』73頁。
- 2 労働保険の生成と展開については、藤瀬(1982:320327)を参照。
- 3 ドイツ福祉国家の二重構造については、Leibfried/Tennstedt1985sowie Sachße1986、28ffを参照。
- 4 例えば、菜食主義運動、自然療法運動、裸体主義運動、自然食運動や、神知学と人知学など。あるいは、土地改革運動、田園都市運動、住宅地運動などであり、これらは、土地や農地の所有および耕作状況を変革することによって、大都市での生活形態や狭い場所に貧困と惨状が集中するという状況に対抗する、「自然に則った」選択肢を作ろうとするものであった(Sachße/Tennstedt1988:17)。
- 5 この点について、Erdbergは次のように述べている。「どの援護事業も、科学的研究に基づいていなければならない。(中略)私達は、私達の社会生活がいかなる方向へと向かうべきか、明確な認識をもっていなければならない。そして、この認識に、私達の援護事業も従うべきである。この要求もまた、学問の助けなしには、満たされることはない。」(Erdberg1911:855)。
- 6 例えば、マックス・ウェーバーが行ったエルベ川東岸地域の農業労働者に関する有名な実態調査、アルフレット・ウェーバーによる家内工業に関するモノグラフ、ヨハネス・フックスによる住宅問題に関する調査などである(Sachße/Tennstedt1988:19)。
- 7 ここでいう保守主義者は、グスタフ・シュモラーやアドルフ・ワグナーであり、自由主義者がルヨ・ブレンターノ、カーノレ・ピュッヒャー、イグナツ・ヤストロフということになる(Sachße/Tennstedt1988:22)。

文献

- Bruch,R.V.(1985)*Bürgerliche Sozialreform im deutschen Kaiserreich*,in:dere.(Hrsg.):*Weder Kommunismus noch Kapitalismus. Bürgerliche Sozialreform in Deutschland vom Vormärz bis zur ära Adenauer*,München,S.61-179.
- Erdberg, R. V.(1911)*Art. Wohlfahrtspflege*,in:Conrad,Johannes u.a.(Hrsg.), *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*,Bd.8,3.Aufl.,Jena S.846ff.
- Fischer,W.(1982),*Armut in der Geschichte*,Göttingen.
- Frecot,J./Geist,J./Kerbst,D.(1972)*Fidus.Zur ästhetischen Praxis bürgerlicher Fluchtbewegungen*,München.
- Frevert,U.(1984)*Krankheit als politisches Problem*,Göttingen.
- Grotjahn,A.(1912)*Krankheiten im Lichte der Sozialen Hygiene*,Leipzig.
- Greschat,M.(1980)*Das Zeitalter der industriellen Revolution.Das Christentum vor der Moderne*,Stuttgart.
- Göckenjan,G.(1985)*Kurieren und Staat machen.Gesundheit und Medizin in der bürgerlichen Welt*,Frankfurt a. M.
- Lampert,H./Althammer,J.(2007)*Lehrbuch der Sozialpolitik.8.Auflage*. Springer.
- Leibfried,S./Tennstedt,F.(1985)*Armenpolitik und Arbeiterpolitik.zur Entwicklung und Krise der traditionellen Sozialpolitik der Verteilungsformen*,in:dise:politik der Armut und Spaltung des Sozialstaates,Frankfurt a.M.S.64-93.
- Mann,T.(1982)*Leiden und Größe Richard Wagners*,in:dere:Leiden und Größe der Meister,Gesammelt Werke in Einzelbänden(Frankfurter Ausgabe),und mit Nachbemerkungenverseden von peter Mendelsohn,Frankfurt.
- Naunyn,B.(1900)*Die Entwicklung der inneren Medizin mit Hyaiene und Bakteriologie im 19.Jahrhundert*,Jena.
- Nipperdey,T.(1983)*Deutsche Geschichte1800-1866.Bürgerwelt und starker Staat*,München.
- Reclam,C.(1869)*Die heutige Gesundheitspflege und ihre Aufgaben*,in:Deutsche Vierteljahrsschrift für öffentliche Gesundheitspflege1,S.1-5.
- Sachße,C.(1986)*Mütterlichkeit als Beruf.Sozialarbeit Sozialrefrom und Frauenbewegung 1871-1929*,Frankfurt a. M.
- Sachße,C./Tennstedt,F.(1988)*Geschichte der Armenfürsorge in Deutschland Band 2*,Kohlhammer.
- Schmoller,G.V.(1911)*Art. Volkswirtschaft, Volkswirtschaftslehre und -methode*,in:Conrad,Johannes u.a.(Hrsg.):*Handwörterbuch der Staatswissenschaften*,Bd.8,3.Aufl.,Jena S.426ff.
- Spree,L.(1981)*Soziale Ungleichheit vor Krankheit und Tod.Zur Sozialgeschichte des Gesundheitsbereichs im Deutschen Kaiserreich*,Göttingen.
- 足立正樹(1982)「古い社会問題と新しい社会問題」神戸大学『国民経済雑誌、146(4)』71—84頁。
- 藤瀬浩司(1982)「ドイツにおける社会国家の成立」岡田与好編『現代国家の歴史的源流』東京大学出版会、317-340頁。

Progress and the scientification of the social reform in Deutsches Reich

Yoichi Tabata

In any country, the problems of poverty which social security deals with can be solved with political measures, because they are also social problems caused by society. Here is the necessity and possibility of La Riforma Sociale. In Germany, economics and preventive sanitation study have attracted attention as academic fields important for La Riforma Sociale since 1860s. The peculiar and ambivalent relation between these two fields became evident as the relation between science and social reforms. La Riforma Sociale in those days was not hostile to science and organizations and the strong connection between social science and La Riforma Sociale was found. This brought about the modernization of the poor relief system.

Key Words: labor problem, ambivalence, poor relief system, social reform, the scientification